

藝術作品に〈正しい解釈〉はあるか？ その探求の足がかり

～ ポール・グライス「意味」(1957) および 渡辺裕「音楽における意図と意味」(1983) の議論の前提

女子美大(院) インタラクティブ空間演習

担当：石井拓洋 2020-9-30

【ポール・グライスの研究】

● A. (根本的問い) 人は、自分の思いを、他者に正しく伝えることができるか？ できるとすれば、それはどのような仕組みで行われるか？

● B. (上記の場合の)「伝える」=「伝わる」=「意味する」

● C. 「意味する」といっても様々なケースがあって、研究対象が漠然としてしまう。研究対象を絞る必要がある。

● D. 「意味する」の二区分(グライス)

- ・自然的に意味する
- ・非自然的に意味する(意味 NN する)

● E. グライスは、自身の問いを探求する上で、「意味 NN する」だけに的を絞った。

つまりグライスにとっては、「意味 NN する」状態が、〈人が自分の思いを他者に正しく伝えた〉状態ということになる。

● F. 「正しく伝わる」には、以下〈5つの要素〉が必ず存在し、そして〈これら全てが関連性をもつことはじめて意味を成す〉必要がある。
いずれを欠いても、主観的妄想となる。

- a. ある伝達意図(A)をもつ話し手
- b. 言葉(記号)
- c. 受け手(ただし、ある伝達意図(A)によって話し手が言葉を使用していることを認識する受け手)。
- d. 文脈
- e. 〈真面目な〉コミュニケーションへの意図(「協力の原理」渡辺 p.87)

● G. なぜ、そもそも「死体にBハンカチ」の例が取り上げられたか？

「意味 NN する」の成立条件に関する巷の学説を批判するため。つまり、上記の〈5つの要素〉が存在していなくても、

- a. の「ある伝達意図(A)をもつ話し手」における、伝達意図(A)が何かを解釈するだけで、b. 「言葉(記号)」の、「正しい解釈」(=意味 NN する)の内容を示すとする学説への批判。

● H. なぜ「死体にBのハンカチ」の例の「ハンカチ」が、真犯人Aの発話を「意味 NN」しないか？

- a. の「ある伝達意図(A)をもつ話し手」は存在するが、しかし、
- b. の「ある伝達意図(A)によって話し手が言葉を使用していることを認識する受け手」が存在しないから。
※ 他方、もし「Bのハンカチ」それ自体で意味が伝わるなら、記号に内在する「傾向性」(スティーブンソン)を認めることになるから。

● I. なぜ「x夫人の浮気写真」の例の「写真」が、その写真を撮りx氏に意図的に見せた「ある人」の表現を「意味 NN」しないか？

a～eの〈5つの要素〉は全て存在している。

しかし、〈これら全てが関連性をもつことはじめて意味を成す〉事例とは言えないから

(a. がなくても、c がその写真をみれば a の意図は十分に伝わるから。だから「意味 NN する」の範疇ではない)。

【渡辺裕「音楽における意図と意味」(1983)の研究 】

渡辺裕は、音楽作品における「正しい意味」解釈があるとすれば、それはいかなる仕組みによって成立するか、を問うた。
そのための〈先行研究〉としては、グライスの論文「意味」(1957)などを、そして、〈研究方法〉(研究的視点)は、グライスの「語用論」の視点をを用いた。

渡辺裕の問い

- J. ある作者のある作品について、その正しい解釈はありえるか？ありえるとする、それはどのような仕組みで行われるか？
- K. 藝術の場合に特に区分すべきこと。(藝術作品が人に「何かを伝えた」といえる2つの場合)石井による整理。
 - 1. 鑑賞者が作品をみて自由にイメージを膨らませることで、何かが伝わったというケース。
 - 2. 作者が伝えたかったことを、鑑賞者が探求して、それを了解することで、何かが伝わったというケース。
- L. グライスや渡辺らの議論では、上記の1は議論の範囲から外れる。なぜか？
 - 上記の〈5つの要素〉について、その一部が無視されていたり、関連性を欠いていたたりするので、そのような情報伝達は「意味 NN する」の範疇ではないから。
 - それは「正しい解釈」というよりも、むしろ鑑賞者の「創造的読み」、または主観的妄想だから。
 - 参考：ロラン・バルト「作者の死」(1967)
- M. グライスによれば、「意味 NN する」状態が、〈人が自分の思いを他者に正しく伝えた〉状態ということになる。
したがって、藝術作品の「正しい解釈」を問う上で、渡辺もまた「意味 NN」するのみに対象を限定した。
- N. グライスによれば、藝術の「正しい解釈」には、以下〈5つの要素〉が必ず存在し、そして、これら全てが関連性をもっている必要がある、ことになる。
 - a. ある伝達意図 (A) をもつ作者 (藝術家)
 - b. 作品
 - c. 鑑賞者 (ただし、作者がある伝達意図 (A) をもって作品を作ったことを認識する鑑賞者)。
 - d. 文脈
 - e. 〈真面目な〉コミュニケーションへの意図 (「協力の原理」渡辺 p.87)